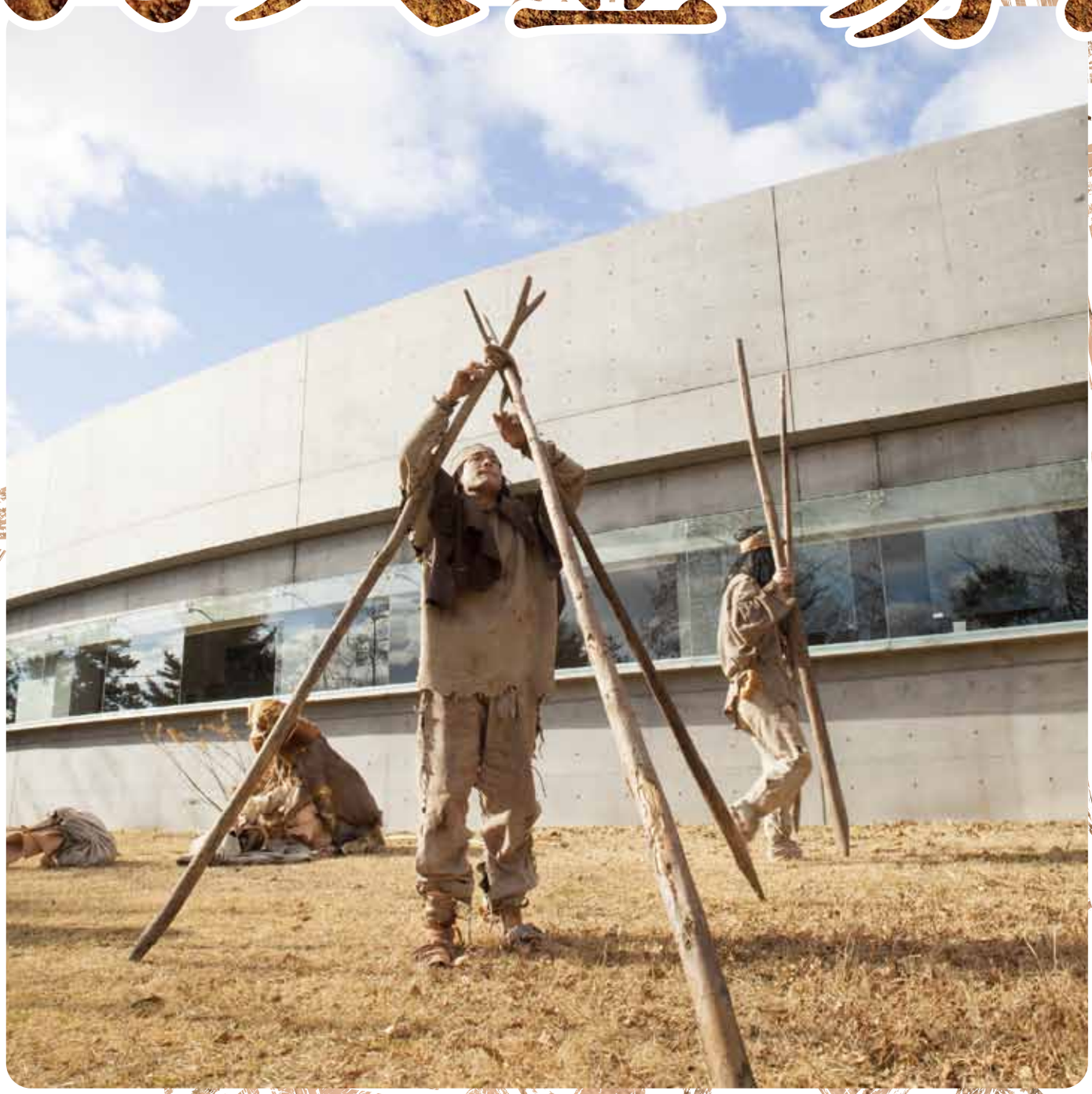
仙台市市民文化事業団設立30周年記念事業

狩人登場！



ミュージアム・シアター
狩人登場！とは何か

ミュージアム・シアターは、博物館の展示に演劇の手法を取り入れる試みです。博物館の魅力は、調査研究からわかった様々な事実が、実物資料とともに展示され、公開されていることです。演劇の魅力は、創造的な身体表現によって、見る人の心に生き生きとした感動を呼び起こすことです。その２つの、全く異なる魅力を、ここ地底の森ミュージアムで融合させたのがミュージアム・シアター「狩人登場！」です。

旧石器時代の遺跡と氷河期の森の跡を保存（地下展示室）、解説（常設展示室）、復元（野外展示『氷河期の森』）し、公開している博物館「地底の森ミュージアム」に、旧石器時代の狩人が時空を超えて現れます。2 万年も昔、氷河期の地球で、彼らはいったい、どんな暮らしをし、何を思い、何を求め、どんな明日を夢見て暮らしていたのでしょう？

五感を研ぎ澄まし、時空を超えた体験に出かけましょう。

運のいいあなたは、もしかすると展示室で、屋外の庭で、旧石器時代の狩人に出くわすでしょう。そうしたら挨拶をして、彼らが何をしているのか、見て、聴いてみてください。時には嗅いで、触れて、味わってみるような体験も、できるかもしれません。狩人たちとふれあううちに、あなたはいつしか、大昔の出来事を、また、これから先、遠い未来の人の暮らしをも、今まで考えたことがないような考え方で、考えていることでしょう。

一期一会の体験を目指して――さあ、ミュージアム・シアター「狩人登場！」の開幕です。

1. 本データは地底の森ミュージアムのミュージアム・シアター「狩人登場！」について、活動の記録や経緯をまとめたものです。
2. 本データの画像は 2016 年度（平成 28 年度）の活動となります。
3. 本データの作成・編集は館員との協議をもとに、中谷可奈がおこないました。写真は渡邊博一氏が撮影しました。

狩人の登場だ！

ウォォォォー！！！

ウォォォォー！！！

鹿肉

ドキドキ

何してるの？

狩人登場！の背景

富沢遺跡の旧石器時代 … 氷河期の終わりに最も気候が寒冷になった時期、人間がこのあたりにやってきて、たき火をしたり、石器を作ったり使ったりした。その痕跡が地面に残され、埋まっていった。「富沢遺跡の旧石器時代の遺構や遺跡」として認識されているのは、これが 2 万年ほど経って掘り出されたものだ。

旧石器人

ミュージアム・シアター「狩人登場！」では、旧石器時代に暮らした人々を便宜的に「旧石器人」と呼んでいるが、そういう「人種」がいるわけではない。氷河期の終わりにこのあたりにいた人たちは、今の私たちと同じ種類の人間だ。基礎的な能力も変わらない。彼らは、自分の周りにある自然の中から取れるものを取り、それを食べたり加工したり使ったりして暮らしていた。世界中に残された同じ時代の遺跡や道具から、そのことは推測できる。

テント

旧石器時代の「家の跡」というものは、日本ではほとんど見つかっていない。しっかりした構造の家を建て、一つの場所で長い期間、生活するようにならないと、「家の跡」は残りにくい。旧石器時代の人は、いろいろな場所を短い期間で移動しながら生活していたといわれている。「家」があったとしたら、跡が残らないような簡単な構造の建物、石器で加工した木や動物の皮を組み合わせた「テント」を作っていたかもしれない。

言葉

私たちは言葉を話すことができる構造の体をしている。言葉で伝えられる細やかな情報がある。言葉を駆使し、コミュニケーションを取り合って生活し、世代を超えて情報を伝達することができたので、氷河期の終わりにいた人間は環境が変わっても絶滅することなく、様々な技術の改良を繰り返して生活を安定させ、人数が増え、住む場所を広げた。旧石器時代の言葉がどんな言葉なのかはわからない。だが、2 万年前の富沢を訪れた人々に、言葉は必ずあっただろう。

服装

富沢遺跡にたき火跡や石器を残した人たちが、何を着ていたのかはわかっていない。動物のように全身を覆う毛のない人間が、寒い氷河期を乗り切って次の時代まで生き延びたのは、服で体温調節をすることができたからだろう。布を織っていた証拠はないので、動物の毛皮を用いた衣服が想定される。日本では見つかっていないが、ヨーロッパや中国などの同時代の遺跡では動物の骨や角から作られた縫い針が見つかっている。

鹿皮

富沢遺跡の氷河期の森の跡には、シカのフンが残っていた。狩人たちはシカを捕えた時にはその皮も利用しただろう。皮を利用するには鞣す作業などが必要だ。動物の皮を加工するために作られ、使われたと考えられる石器は、富沢では見つかっていないが、日本各地、世界各地で見つかっている。

動物

氷河期のこのあたりには、現代の日本列島に暮らすシカと同じぐらいのサイズのシカがいたことがわかっている。ほかの小動物も、狩って食べたり、皮を利用したりしただろう。氷河期の古本州島（今の日本列島の形になる前の島）には、ゾウやウマやウシや、今よりも大型のシカもいたことがわかっているが、富沢でたき火をしていった人たちが、それらの動物を見たことがあったのか、食べたことがあったのかはわからない。

たき火

富沢遺跡では、炭のかけらがたくさんみつかる場所が 1 か所あった。たき火の跡だと考えられる。ここで 2 万年前にたき火をした人がいたことや、周りの森から集めてきた木を燃やしたのだろうということはわかったが、どうやって火をつけたのかはわからない。縄文時代以降の日本列島で見つかった発火具からは木と木をこすりあわせて、摩擦熱で火をおこしたことが推測できる。

槍

旧石器時代の木製の槍は、ヨーロッパの遺跡で見つかっている。現代のやり投げ競技の槍とサイズなどが似ているそうだ。日本ではまだ確実な発見例はない。見つかるのは石器だ。木製の柄の先に取り付けて使ったと考えられている石器はある。だが、それが手にもって刺すような道具なのか、投げて獲物に刺すための道具なのか、はたまた弓などのほかの道具と組み合わせて使われたのか。研究者は石器の大きさや形、壊れ具合やすり減り具合などから探ろうとしているが、狩りの道具の実態は、まだはっきりとはわからない。

シャーマン・儀式・ものがたり・歌・踊り 狩りの安全を祈るため、自然の恵みを祈るため、儀式などはあったのだろうか。それをつかさどる役目の人もいたのだろうか。ヨーロッパに残された洞窟壁画や記号とみられる印、世界各地に残された装身具や実用ではないと考えられる道具の数々から、当時の人間が、抽象的な思考や表現をしていたことがうかがわれる。

狩人登場！沿革

2014 年度

特別企画展「The Hunter ―狩人の石器―」に伴うイベントとして開催。
狩人 2 人が館内外に出現し、来館者と触れ合う「狩人出現！」と、5 人が短い芝居を含むダンスパフォーマンスを繰り広げる「狩人パフォーマンス！」を実施。「出現」は平日の登場日、「パフォーマンス」は休日の登場日に行った。「パフォーマンス」の前後は館内外で来館者と触れ合う「出現」を行った　。計 12 回実施。

【出現】
「狩人登場！」は館に所蔵されていた、地下映像撮影時の衣装を活用して“いにしえの狩人”に扮した劇団員が、館内外で出現し、来館者とふれあった。この時点では言語の打ち合わせ等はなく、それらしい音声のアドリブ。石器づくりなどのスキルもない状態から覚えながらの実施。
【パフォーマンス】
「狩人パフォーマンス！」は協力団体「劇団 短距離男道ミサイル」の既存のパフォーマンスである「野武士リズム」を狩人バージョンに変更して実施。いにしえの人たちが現代の環境に驚いたり、グループ内で小競り合いをしたりといった小さな芝居のあと、機器の電源が入って音楽が流れ、踊りだすという内容。機器を用い BGM を流して行った。

2015 年度

指定管理者公益財団法人仙台市市民文化事業団の自主財源事業として実施。
事業名「ミュージアム・シアター『狩人登場』」。
来館者の鑑賞機会が増える夏休み期間中に、回数を増やし、前年度同様、平日の「出現」（2 人程度）と休日の「パフォーマンス」（5 人程度）の組み合わせで行う。計 27 回実施。

【出現】
所蔵の衣装に加え、夏の衣服をイメージした鹿皮の衣服と履物を衣装家に委託し制作。夏の狩人の生活をイメージさせる出現と来館者とのふれあいを行う。狩人の言語を劇団員により創作、言語による会話の様子を見せ、「狩人語」で来館者とも会話。
【パフォーマンス】
鹿の毛皮と骨角を使用した「シャーマン」イメージの衣装を衣装家により制作。着飾ったシャーマン役を中心に据えた儀式的パフォーマンスを創作。音声（狩人語の歌と掛け声）、木の皮や鹿の角で作って音を鳴らせるようにしたものでのガラガラ音、足踏みや手を叩く音等で、音と踊りのパフォーマンスを成立させる。パフォーマンス後はシャーマンが観客に祝福のしぐさをするなどのふれあいも取り入れる。

2016 年度

指定管理者公益財団法人仙台市市民文化事業団の自主財源事業として実施。
事業名「ミュージアム・シアター『狩人登場』」。
5 月から 2 月までの通年での登場とし、回数を増やす。基本は平日の「出現」（2 人程度）と休日中心の「パフォーマンス」（5 人程度）の組み合わせ。内容は季節ごとに内容を変化させ、旧石器時代をより考える契機になる内容を工夫。春は女性と子どもの登場、夏は狩人達の儀式パフォーマンス、秋は食料加工やテントの組み立てを見せ、冬はテントのそばでたき火をし、鹿肉を切ったり焼いたりした。計 36 回実施。

【出現】
冬の登場に備え、冬の衣服をイメージした鹿皮の衣服と履物、毛皮のマントと腰当、頭巾を衣装家に委託し制作。春は乳児と女性と男性での登場、夏～冬は狩人たちとシャーマンの登場。狩人語で会話し、石器を作り、使うところを見せ、来館者と触れ合う。
【パフォーマンス】
夏は狩人とシャーマンの激しく活気ある儀式パフォーマンス、秋は冬に備える祈りを思わせる静かなパフォーマンス、冬はテントの設営やたき火を中心的に見せる内容とし、石器で切った鹿肉をテントのそばで干し肉にしたり、たき火であぶって食べるなどの行動を見せながら、シャーマン役がテントの中に来館者を招き入れて、狩人語で物語を聞かせ、祝福を与えるパフォーマンスも随時行った。

ある日の 狩人登場！

9：00 ―― 来館・準備
場所と内容の確認　※季節（暑さ・寒さ）や天候（雨・風）で内容を調整
リハーサル・着替え

13：00 ――「狩人登場！」開始
随時、事務室にて情報交換（来館者の動向や内容の微調整）及び休憩
パフォーマンスを行う前には衣装替え

16：00 ――「狩人登場！」終了・片付け

16：30 ―― ふりかえり

「ふりかえり」は全体の情報共有と「狩人登場！」の深化のために、毎回行われ、記録を残しています。

ふりかえり①
演じ手と職員がその日出会った来館者（大人、子ども、男性、女性）の反応について…

劇団員「いつもより狩人の鋭さ・迫力を意識して、大人・子ども関係なく演じてみました。」

職員　「来館者の反応は？　違いを感じましたか？」

劇団員「最初はとっつきにくい感じを来館者は受けているようです。最後のほうで、小さな女の子に泣かれてしまいましたが、親を仲介してフォローはできたと思います。」

職員　「遭遇場所の条件（明暗、館内外など）によって、来館者へのインパクトはだいぶ異なりますよね？」

劇団員「やり取りの中で徐々に打ち解けられています。次回も狩人の雰囲気を意識して演じたいと思います。」

職員　「狩人と遭遇する意外性・面白さは増すので、その方向性で行いながら、より一層来館者の年齢を意識した活動をお願いします。」

劇団員「服を触ってくるお客さんが多く、厚みを確かめたり、あたたかいのか興味を持ったり、各狩人の装備を見比べて「寒いねー」「あったかそうだね」など声をかけられます。」

職員　「衣装のリアリティ追及も重要であるということですね。」

ふりかえり②
演じ手から演じるうえで生じる疑問や、表現者の提案があったときは…

狩人には共通のルール（現代人とはズレているしぐさ・行動）がある方がいい。それにより、狩人同士は同じ社会・文化の人たちで、現代人とは違うことに気が付きやすくなる。
具体的には「先に笑いかけない」「歯を見せて笑う」「笑いのやめ方を急にきっぱりとする」「かみ合わせを意識する（縄文時代の人骨の前歯をみると、上と下の歯が合わさるため）」を実行してみる。

こうした「ふりかえり」を積み重ね、より狩人らしく、より旧石器時代の人らしく、変化を続けながら、みなさまの前に登場しています。

ミュージアム・シアター「狩人登場！」は、2014 年夏の特別展「The Hunter－狩人の石器」展に伴い、初めて導入された。当時、特別企画展の主担当だった佐藤祐輔学芸員（2017 年 3 月現在、仙台市縄文の森広場勤務）と、企画について話し合っていた際「何か『やってみたいこと』はない？」と尋ねられたのがきっかけだった。特別企画展は、年四回の企画展の中で、もっとも予算規模が大きい。普段はできないことも少しならできる。地底の森ミュージアムを初めて訪れた時から心ひそかに持っていたイメージが、思考の表へ急浮上した。

地下展示室では毎日、保存展示されている遺跡の上方にスクリーンが降りてきて、旧石器人が登場する「2 万年前のある日」の再現映像が 10 分置きに再生される。それを見て、氷河期の森の跡と、旧石器時代の小さなたき火の痕跡が保存された遺跡の展示を後にし、1 階へ上がり常設展示を通って展望ラウンジへ出れば、氷河期終わり頃の当地の環境を復元した野外展示「氷河期の森」が、ガラス窓の向こうに広がっている。あの針葉樹の下、あの湿地を再現した池のほとりに、映像に出てきた、あの旧石器人がいたらいい。

旧石器人は狩人である。着ぐるみのように人懐っこく振る舞わない。現代人のガイドのように説明もしない。ただ、旧石器人として、そこにいて、石を割ったり道具を使ったり、肉を干したり昼寝をしたり、時々現代人の見学者に話しかけたり、話しかけられたり、心のままに、旧石器人が庭にいる。そんな風に、ここにだけ、局地的にでも、本物の旧石器時代があればいい。

ずっと持っていた密かなイメージに、兼ねてから興味のあった、演劇を博物館に導入する「ミュージアム・シアター」という手法が、企画展の「狩人」というキーワードと合わさって、頭の中で急に具体的な計画になった。「こういうのはどうでしょう。地下の遺跡や、外の森に、旧石器時代の『狩人』がいるんですよ」言いたいことは意外なほどすぐに伝わった。「それは恰好だけの素人じゃダメだよね、『本物の旧石器人』に『なれる』人じゃないと。演劇のプロじゃないと。いいんじゃないの、実現したら面白そう。今回の企画でできると思うよ」佐藤学芸員の乗り気、かつ実行力のある発言に喜んだ途端「じゃあ、心当たりのプロがいたら、話をつけてきてくれないかな？」まさかの役目が任された。心当たり、と言われて思い浮かぶアテは、実は、一つしかなかった。

遡ること 1 年以上前。初めて見た時の彼らは、定禅寺通りのグリーンベルトで、半裸で踊っていた。野武士リズム、と名付けられたダンスパフォーマンスだった。室町時代ぐらいならば傾奇者で通ったかもしれないような恰好をして、『野武士』という世界観を成立させるちょっとした芝居をいれながら、大音響の音楽に乗せて喉いっぱい叫んで、体いっぱい踊って、汗をいっぱい振りまいていた。技巧がどうとか以前にびっくりしてしまい、芝居がうまいのかどうかも、実のところよくわからなかったが、本物の芝居の迫力と、気概を感じたと思った。次に彼らを見たのは、2013 年冬の初めごろ、彼らの舞台『裸のリア王』だった。裸なのに、内輪ネタ満載なのに、舞台装置もほとんどないのに、むしろ舞台は舞台ですらなく、能舞台の客席側を利用して設置されたものなのに、中身はものすごくリア王だった。悪ふざけぎりぎりのような、素人臭さぎりぎりのような、その境界線があいまいなところで、まるで舞台と客席の境界線も、リア王の時代と現代の境界線も、あやふやになって融合してしまって、百年も前に書かれた芝居のセリフを、普遍的な人間の真実の声として聴いている。彼らは真摯で、とてもうまいのだと思った。彼らは演劇をしている。演劇の中で演劇じゃないこともしているが、確実に本物の演劇をしている。彼らなら、演劇の力を博物館に持ち込める。虚構だからこそ実現できる現実（リアル）を、目の前、この場に出現させることができる。『本物の旧石器人』に『なれる』。

その日長文のメールを書いたのを覚えている。情熱のありったけを込めて、博物館の意図を伝える方法として「ミュージアム・シアター」という手法があること、これを当遺跡保存館で実施したら効果はいかばかりかと考えているということ、当館に時折でも本物の旧石器人がいたらどんなに素晴らしいだろうか（と、私が思う）ということ、その旧石器人を出現させることができるのは、あなた方を措いては他にないと思っている、ということを書いた。彼らに断られたら、代わりにどうしようか、などという次の手は考えていなかった。この企画には『旧石器人』が必要なのであって、それらしい恰好をしただけの現代人を代わりに立たせておくくらいなら、何もなしの方がいい。演出家で役者でもある澤野氏から、「自分たちも、地底の森ミュージアムで旧石器人になれるのは、自分たちを措いてはないだろうと思う。ぜひ協力したい」という返事がすぐに送られてきた時には、それはもう嬉しかった。ミュージアム・シアター「狩人登場！」の実現はこのようにして確定した。

地底の森ミュージアムの伝えたいこと。ここで保存され公開されている、旧石器時代の遺跡は、何を物語っているのか。この場所で旧石器時代の人間は、いかに生きていたのか。掘り出された情報は、過去の一部分を垣間見させてくれるに過ぎない。しかしミュージアム・シアターを実現できれば、遺跡からのメッセージは、遺跡そのものの保存展示や復元画、映像、氷河期の森の復元展示と相まって、失われた過去からの越えがたい境界をさらに超えて、現実の側に迫り来ることができる。遺跡から得られた情報は、ミュージアム・シアターを実現しても、増えるわけではない。だが、伝える声に色が付き、知識に生きた血が通う。来館者の心へより一層届く。旧石器時代に人間が生きていた。今とはずいぶん違う環境で、ずいぶん違う暮らしをしていた。どんな暮らしだったか、ほんの少しだけわかっている。だが、あまりにも手がかりが少ない。地底の森ミュージアムを訪れた人は、つかの間、旧石器人に出会い、生身の実感を持って「わからない」と思い、その「わからない」ことを「知りたい」と思い、過去に、また人間というものに、さらなる興味を持つだろう。

地底の森ミュージアムで実施してきたミュージアム・シアター「狩人登場！」については、2005年に出版されたキャサリン・ヒューズ著・安井亮ほか訳『ミュージアム・シアター博物館を活性化させる新しい手法』（多摩川大学出版部発行）をもとに考え、組み立てを行ってきました。以下、その一部を抜粋して引用します。

ミュージアム・シアターとは（引用）

「あえて意味の限定を求めずに定義化を試みてみると、「ミュージアム・シアター」とは、博物館の施設の中で、あるいは博物館が提供する舞台装置で行う、芝居もしくは演劇的な手法のことを言う。博物館の展示あるいは教育プログラムとともに上演される「ミュージアム・シアター」は、観客に情緒的であり、また認知反応を喚起することを目的としている。」（pp.16　定義化に向けて）

「ミュージアム・シアターは観客参加型の演劇である。演劇はライブであるため、常に上演する側と観客との間に、双方向のコミュニケーションが存在している。」（pp.122）

「ミュージアム・シアターは決して演劇的な技法を便宜的に借りてきているのではなく、ましてやそれは演劇的なデモンストレーションでもない。ミュージアム・シアターは他ならぬ演劇なのである。」（pp.81）

脚本について

「一次的な歴史資料を扱うにしても、科学的概念にしても、学識経験が必要である。あらゆる参考資料には、出典を添えなければならない。質問された時に、具体的に答えるためだ。」（pp.159）

アウトリーチの可能性

「ミュージアム・シアターはそれだけで立派な演劇となり得るが、博物館から離れては、ミュージアム・シアターとしての立場を全うすることはできない。（中略）施設の枠を離れて、立場を全うできる方法が多数ある。（中略）仮にある劇が博物館を離れて巡回するとすれば、さらに可能性が広がることを期待しよう。」（pp.141）

ミュージアム・シアター「狩人登場！」
平成29年3月31日
発行・編集　（公財）仙台市市民文化事業団 仙台市富沢遺跡保存館
〒982-0012　仙台市太白区長町南四丁目3-1　TEL：022-246-9153